

## アドリア海 of 海賊ウスコクから見た近世の国家形成

越村 勲

地中海の東部、イタリア半島とバルカン半島に挟まれたアドリア海が本稿の舞台である。また海賊という集団が分析の対象である。最近の歴史学では、海賊に注目して、近代国家の成り立ちを新しい角度から見直そうという動きがあるが、筆者は一五・六世紀まで時代を遡って、その海賊を「最初のグローバル化」と「近世帝国」に対する民衆の反抗形態として見直したいと考えている。

この「最初のグローバル化」の中でどのような人々がなぜ海賊になり、ユーラシア大陸の西端（東端の海賊に当たるのが後期倭寇である）で強大な国家と戦い、またハプスブルク（およびオスマン）帝国の形成に関わったかを検討すること、以上が本稿の課題である。

史苑（第七七卷第二号）

## 序章 ウスコクという名の海賊たち

## かれらをどう捉えるか

これまで筆者は、クロアチアの「軍政国境地帯」という境界地域を研究してきた。この「軍政国境地帯」というのは、オスマン帝国が勢力を拡張し、オーストリアに進行した一六世紀から、一九世紀まで続いたハプスブルク帝国の対オスマン国境であり、その大半が現在のクロアチアを横断し、アドリア海まで伸びていた（地図1参照）。そして当初はオスマン軍勢に襲撃されたハプスブルク帝国側の人々が、後にはオスマン帝国から、その支配を逃れてきた人々だが、この海への出口で海賊を働いた。かれらはウ

アドリア海海賊ウスコクから見た近世の国家形成（越村）

スコクと呼ばれたが、この呼び名（クロアチア語の動詞ウスコチテイ、「飛び込む」に由来）は、初め避難民全般を指し、やがて略奪者とくにオスマンの船を襲うなど略奪を行う海賊を指すようになった<sup>1)</sup>。

## 1、ウスコクの活動の推移と特徴

### ①ウスコクの活動の舞台

ウスコクはアドリア海で活動したが、沿岸の山岳地帯でも活動した。

セーニ（砦と港の町）のウスコクが襲撃を行なった場所は主に三つ。一、オスマン領のリカ地方でヴェレビト山脈の東側。二、そこから南、ヘルツェゴヴィナの後背地で、とくにドウブロヴニク領と接する地域。三、そして広くアドリア海の海域である。一のリカ地方については、一五八〇年代、オスマン帝国の施策によって人々が入植し、その要塞もつくられて以後、この地域を襲撃することは危険視された。次に、二の地域でウスコクの遠征が頻繁になり、さらに三のより南方の海へ、また（ヴェネツィアやドウブロヴニクの海岸地方を通じて）ボスニアやヘルツェゴヴィナの内陸へ進んで行った。一六世紀の終わりに向かって、襲撃と戦利品の増加はウスコクの「名声」を高め、その数を増やした。しかし同時に、ヴェネツィアの海上封鎖

や、ウスコクの軍政国境での襲撃にたいする監視が強化される。とくに、セーニが包囲されて自由を奪われると、ヴェネツィア船を襲撃する必要に迫られた<sup>2)</sup>。

### ②ウスコクの活動

#### i 家畜（羊、山羊など）の略奪

リカとオスマン後背地への襲撃によって得られる主な戦利品は、羊や山羊などの家畜だった。それは軍政国境当局からの、あてにならない食料補給を補うためだった。ただし、大量の肉を保存するための塩は入手できなかった。アドリア海の塩の取引はヴェネツィアによって厳重に管理されていた。そのためウスコクは、肉の供給を確保するため家畜の略奪を繰り返さなければならなかった。

#### ii 奴隷かまたは・・・

ウスコクがオスマンの船を襲撃する場合、略奪品に次いで重要な標的が捕虜だった。その際、イスラム教徒とキリスト教徒の両方がウスコクの捕虜になった。オスマンの臣民が捕虜になれば、ダルマティアやイタリアの家庭で仕えるか、西欧のガレー船の漕ぎ手になるか、あるいは内オーストリア大貴族の領地で働かされた。

しかし、奴隷は定期的に売れるものではなく、人質は奴隷として売るよりも身代金を得ることの方が多かった。食

料不足の時ウスコクは、金銭での支払いは受け取らず、穀物や肉といったより「現実的な」商品を求めた。

### iii 貢納金

ウスコクは略奪をしない見返りとして、相手から貢納金を取った。オスマン領の村々は、一五七六年頃から、ウスコクに貢納金を支払っており、一五九九年までにはオスマン帝国領の約四〇〇〇世帯がこの貢納金を支払っていたと推定される。

貢納金については、軍政国境の將校たちもその一部を受け取っていた。一六〇〇年代の初めまで貢納金は、セーニの隊長個人や軍政国境將軍たちの「役得」とみなされていた。

### ③ コルセアというよりは海賊

歴史的な海上暴力には、国家が遂行する戦争と密接な関わりを持つ暴力もある。財政難を抱えていた近世国家は、戦時に、海賊をはじめとする船乗りたちに戦闘への参加を求める。これは、国家にとっては安上がりな戦力を意味し、扉われた者たちにとっては戦争から利益を得る好機となる。いわゆるコルセアである。

地中海コルセアのイスラム教徒側の代表例がバルバリア・コルセアである。一方で、反イスラムのキリスト教徒

のコルセアもいた。それが聖ヨハネ騎士団である。騎士団はマルタ島を拠点にイスラム教徒やユダヤ人を襲撃し、同島はイスラム教徒など奴隷売買の中心地になった<sup>③</sup>。

ここでマルタ騎士団とウスコクを、経済的活動の規模や内容を含めて比較してみる、そうするとウスコクは、コルセアよりも海賊に近いことが分かる。

マルタ騎士団、ウスコク、ともに海賊行為を経済活動として行っていた。しかしマルタ騎士団のコルセア活動は、商人の資本提供を受けた大掛かりなもので、イスラム教徒を奴隷として扱って莫大な利益を上げた。一方ウスコクは戦利品を商人に買い叩かれた。そもそも戦利品が不定期で、予測できない程度にしか入って来なかった。また身代金の収入にも限りがあった。

何よりも、マルタ騎士団はそれ自体が一つの国家のような権力をもっていたが、ウスコクはオーストリア国家から黙認されたにすぎず、国際関係上都合が悪くなればいつでも見捨てられる存在だった。

マルタ騎士団はカトリック法王の支持を背景にし、西欧各地に騎士団領があった。ウスコクはあくまで、国を追われたか、国を棄てた非エリートだった。

ウスコクは、一部が有給兵士なので一見コルセアに見えるものの、大半が無給兵士で、大半が海賊行為で生きてい

た。

そのウスコクは最後にどうなったか？滅亡のきっかけは、一六一五年の十一月、ヴェネツィアがハプスブルク帝国に対して戦線を布告した「ウスコク戦争」であり、この戦争後ウスコクの多くがクロアチア軍政国境地帯の内陸部へ移住させられた。

## 2、ウスコクを大きく捉えるための枠組み

### ①一六世紀後半、二つの近世帝国の関係性と相違

i 防衛と拡張…一六世紀の後半、軍政国境のオーストリア防衛システムは集中・効率化され、一五七八年、ステイリア、カルニオラ、カリンシアの諸身分は、内オーストリアの大公が軍政国境に直接的な責任をとることに同意し、これらによる支援体制が確立した。

一方オスマンの拡張政策については、部分的にはイスラーム的な聖戦概念で説明されることもできるが、独特の経済・社会構造によって支えられていた。それはティモール制であり、ティモールはスルタンが所有し、認定する一種の封土だった。<sup>4)</sup>

因みに、一六世紀後半のヴェネツィアにとって重要なのは、一五七三年のオスマン帝国との講和であり、この条約は、アドリア海に対するヴェネツィアの支配の条件として、

同海域でオスマン船の安全を確実にすることを強いた。

### ②長期戦争（一五九三～一六〇六）前後の重要な変化

i 軍事革命…この戦争の間、ハプスブルク帝国は、ヨーロッパの大国と同様、城と要塞の建設、改善された銃を装備する歩兵連隊を充実させた。これに対して、オスマン帝国側もその最強部隊を補強して、銃による戦闘という問題に対処した。しかし、一六世紀までの、オスマン軍の圧倒的優勢は、崩れたのである。

こうしてオスマン帝国との長期戦争とジトヴァ・トロク講話条約（一六〇六年）は、オスマン帝国の更なる拡張が困難であることを示した。<sup>5)</sup>

因みにヴェネツィアは、一六〇四年、オスマン帝国の政治的弱体化を利用して、従来の、アドリア海でのオスマン船舶の安全確保という「条件」から脱却し、自らの経済的な利害からウスコクを取り締まるようになった。

## 3、ユーラシアの近世諸帝国とハプスブルク帝国、オスマン帝国

ここで、いくつかの研究を参考にして、ユーラシアの近世諸帝国の関連性を捉えるための大きな枠組みを抽出しておく。

## ①世界システム論の見直しとユーラシアの近世帝国

I・ウォーラーステインは、全ユーラシア的な大勢においては、まだ世界Ⅱ帝国（租税の徴収と再分配によって分業体制の根幹を握る強力な政治権力）優位の「古い」パターンが続いているのに対して、ひとりヨーロッパだけが、世界Ⅱ帝国から（資本主義）世界Ⅱ経済への転換を果たしたと二項対立的に見ている。これに対して、山下範久は、「グローバルな長期の一六世紀は、ヨーロッパも含めた五つの近世帝国のバラレるな形成期であった」という見方を示した。中世のモンゴルの一大帝国が崩壊したあと、五つの近世的な地域システムによって分節化され、それぞれがひとつの「世界」を形成しているものの、「理念としての帝国」という同じ型をとったと見ている。

本稿にとって特に重要な指摘は、「長期の一六世紀（一五世紀の後半から一七世紀の初頭）が前期と後期に二分されること、また、その境がウスククと倭寇が活動した「おおむね一六世紀の三つ目の四半世紀」だということ。

その前期では、「中世の危機」の後に鋭い経済活力が発揮され、生産性が回復し、人口は再び増加し始めた。一方後期は、安定した経済制度化の期間であった。前期においては「世界」は固定的に閉じたものではなく、交通空間は域際的な広がりを見せた。それは、一方で帝国の拡張政策

と結びついた。後期に入ると交通の回路は選別され制度化されて、収益と蓄積の強化・安定化が図られた。その過程で、帝国が、「世界」としての地域システムの核となった。

## ②A・リーバーによる「ユーラシアの境界地域」の比較研究

A・リーバーは、ユーラシア諸帝国の辺境と「境界地域」の進化について、従来の地政学的あるいは文明論的なアプローチと異なつた「地理文化的な」見通しをたてる。

まず注目したいのは、リーバーによる、近世の軍事革命についての比較である。オスマン・サファヴィー・中国の三帝国はヨーロッパの新たな火器を利用して、戦場で、より効率的に自らの帝国の人的資源の巨大さを活かそうとするが、イエニチェリなどの特権的なエリート戦士の激しい抵抗に遭遇して、近代的常備軍をつくることができなかつた。それが一九世紀前半に、それぞれの帝国の衰退と崩壊を早めた。他方ユーラシア南西と中央の境界地域で、ハブスブルク帝国とロシア帝国は、それぞれの支配者の権威を拡大して、効果的で求心力のある近代軍をつくることのできた。リーバーはそのように見ている。

本稿にとって重要なのは、リーバーが遊牧民の動きを長期に、とりわけユーラシア規模でフォローし、定住民との社会レベルでの関わり、あるいは帝国の遊牧民政策の比較

アドリア海海賊ウスコクから見た近世の国家形成（越村）

を行っていること。そしてこうした遊牧民による反抗の好例として、バルカンのウスコクやハイドゥクを取り上げている。リーバーによれば、帝国の支配に対する暴力的抵抗は、境界地域における闘いの最初の段階に強盗や農民暴動という形をとった。重税や帝国の差別的な土地政策は、征服された住人の間で不平を貯め、「中心の」農民と反抗を共有させた。反抗は帝国の力の周辺で、辺境に沿って、または、山岳地方で開花した。バルカンのこの反抗者はウスコクやアルマトラスなどと呼ばれたのである。

## 第一章 ハプスブルク帝国の国家形成とウスコク

一四九六年ハプスブルク家のフィリップ一世がスペインの王女と結婚して、同家はその世界帝国の基礎を築いた。一六世紀にハプスブルク家の神聖ローマ皇帝は、二つの使命に直面した。オスマン帝国と宗教改革に対する防衛である。そして一五二二年に皇帝フェルディナント一世は、クロアチア海岸（特に要所セーニ）の保護をクロアチア総督に約定した。以後の対オスマン防衛に関しては、ウィーン宮廷の外交重視とグラーツ宮廷軍事局の軍事重視が対立する。そしてグラーツの大公はウスコクを利用した。しかしウスコク中の非正規兵たちが「急増、暴走」するのである。

### 1、ウスコクはどこから来たのか？

ここで一六世紀から一七世紀の滅亡まで、セーニの海賊ウスコクの人的構成について見ておく。

ハプスブルク帝国は、一五四七年に兵員の縮小を試みるが、それでもセーニに新たな兵士たちが流入する。一五五一年の給与台帳を見ても、新兵が大量にセーニへ流入。台帳からとくに出身地が分かる家族を選び出すと、一五五一年に移住してきた者の大半がハプスブルク領の出身だった<sup>1)</sup>。

それが一五五〇年代の終わりから一五六〇年代にかけてオスマン臣民やヴェネツィア国民の数が増え始める。この頃からウスコクは難民をさすことばから罪人や流民を合わせて略奪者を意味することばになった。

一五七〇年代になっても、「自分のくにを逃れ、セーニで暮らすことになったオスマン臣民でウスコクと呼ばれる難民、さらにはアンコーナなどの諸都市から追放された人々、また、あらゆる島々や近隣の町々からの亡命者、ガレー船からの脱走者といった人々で邪悪な男たちのガイドや指導者として働く多くの人びと」<sup>2)</sup>がセーニで「新兵」になった。

一五七〇年代から一八〇年代にかけて、ハプスブルク領からの新兵の数は大幅に減る。一五七八年に軍政国境の指揮官制度が整い、要塞網も整備されて、内陸の国境で「新



地図1 1590年代のウスコクの出身地（給与台帳を分析し、氏名から出身地が分かる人たちをピックアップしていく。出身地が分かる割合は、1530年から1620年までの838家族中261）

出典：Catherine Wendy Bracewell, *The Uskoks of Senj: Piracy, Banditry, and Holy War in the Sixteenth-Century Adriatic*, Cornell University Press, 1992, p.62.



兵」になれたため、セーニまで流れてくる必要がなくなつた。それに代わつて海岸沿いの山岳地帯で、いくつかの重要な港町の後背地にあたるオスマン領地から流れてくる人たちが増えた。これらの領地は一五七〇年から一五七三年にヴェネツィアとオスマンが戦争をした際に荒らされた。そのため多くのオスマン臣民がヴェネツィアの兵になり、動員が解かれた後も元の生活に戻れず、結局はセーニにたどり着いた者が多い。また一五八〇年代にクリス要塞の奪還を試みた軍勢に加わり、この奪還が結局失敗に終わってセーニにやつてきた人たちも多い。一五八八年ごろには、セーニのウスコクの九割方はオスマン領出身といわれるようになる。前出のA・リーバーは、ウスコクの中心は牧畜民ヴラーフであり、そのヴラーフはとりわけ一五九〇年代に大挙してきたと述べている（ウスコク内のヴラーフの比重を画定することは難しいが、本稿第三章で、ウスコクと同時期の内陸の部隊におけるヴラーフの趨勢を分析する）。一五九〇年代セーニの町は海沿いのオスマン領山地からやつてくる移民の波に飲み込まれる。こうした山地を飢饉が襲つたのである。オスマンは食料の海岸への輸出を禁止する。そして長期戦争が始まる。一五九六年、当時セーニの人口は四五〇〇人ほど、そこに一〇〇〇人のウスコクがいたと言われる（表1参照）。

## 2、ウスコクはどのような人々？

セーニの地元出身のウスコクは、一六一五年の時点でもおよそ一〇家族ほど残っていた。ただしこの地元市民と難民などは互いに婚姻を重ねており、両者の区別は必ずしも容易ではない。また利害関係、すなわち町の経済のために掠奪をするという点で両者は一致していた。地元の旧家には、国境警備の正規兵の中で重要な役割を果たす者や、中には貴族もいたが、こうした人々も、また、さらに貧しい市民もウスコクに加わつた。

次にヴェネツィア領から逃れてきた人々だが、海岸部、ヴェネツィア領ダルマティアの出身者が多い。ヴェネツィア当局はオスマンに対して反乱を起こして逃れた者と、ヴェネツィア国内で罪を犯した逃亡者との区別を試みたものの、実際の区別は困難であった。ウスコクになった動機は、貧しさとか、特権を奪われたといった動機が多い。一五七〇〜七三年のキプロス戦争でダルマティアの農業地帯がオスマンに奪われる。わずかな土地に難民があふれ、全体に貧困と飢饉が深刻化。掠奪しか生きる術のない人々も現れた。するとヴェネツィアのウスコク取締強化にたいして、農民がウスコクをかくまうケースも増えはじめる。農民・ウスコクとヴェネツィア当局の対立関係には、ダルマティアの農民にとっては罪にならないことがヴェネツィ



アの法では罪になるといった（たとえば塩の売買、ヴェネツィアはこれを専売化していた）矛盾も関係した。

最後に「冒険者」つまり金儲けのためにやってきた者もいた。

ハプスブルク領から逃れてきた人々については、オスマンとの国境付近に住んでいた人々が多かった。まずは、オスマンの兵に襲撃されたが、守ってくれる者もなく、兵士として雇ってくれる部隊も近くなかったためセーニへ来た例が多い。

海岸では、ウスコクに襲われた者がウスコクになって誰かを襲う、といった場合も。そして襲ったウスコクは、なるべく相手をセーニに集めようとした。<sup>15</sup>

### 3、オーストリアによる「緩やかな統率」の実態

一五三七年本格的にはじまったウスコクの活動は、一五九〇年代に最盛期を迎えた。

軍政国境の入植者ならば、放棄されていた土地を分け与えられ、家畜や作物にかかる税は免除され、入植者の一部だけが常備軍として守備につき、任にしている間は賃金を受け取った。しかしセーニのウスコクに土地は与えられなかった。

宮廷軍事局はセーニのウスコクに土地を分け与えること

ができなかったため、有給の兵士たちは国境の他地域よりも少し多めの俸給を授けるはずであった。またステイペンディアーティつまり軍役を登録されたウスコクは、動員された時だけでなく、年間を通じて補助金を受け取るようになっていた。また軍政国境の当局は、ウスコクに割り当てられた予算の一部を守備隊全体の穀物の購入に使うことになっていった。しかしどの決まりも円滑に実行されることはなかった。

セーニでは下級の兵士も軍政国境の将校もこの状態を不満に思っていたが、財政運用が改善されることはなかった。一五七九年一月には、隊長K・ラーブがセーニ市内に穀物が一粒もないことを報告し、「延滞が続けば続くほど、危険な状態になる」と訴えている。<sup>16</sup>三月には三カ月分の給料が出ると言われながら、実は一カ月の給料しか出ないと分かるウスコクたちは反抗的な動きを見せる。

セーニで給与の支払いが遅れた原因の一つは、助成金集めの難しさにあった。一五七八年にはカルニオラ、カリンシアア二州の貴族はクロアチア軍政国境の財政を担う責任を負った。しかしいづれの分担金も遅延が多く、一部しか支払われなかったり、全く支払われないことも。また一六世紀の間物価が上がったのに対し、ウスコクの給与はほとんど同じだった。<sup>17</sup>

アドリア海海賊ウスコクから見た近世の国家形成（越村）

結局軍政国境当局は、ウスコクの略奪行為についてどのような態度をとっていたのか？

どうやら経済的自助努力として、黙認していたと言っている。そもそもハプスブルク当局に数多い国境兵士の給与を担う財政力はなく、むしろウスコクの略奪品は、軍政国境の將校たちの収入に確実に組み込まれており、軍政国境の財政に貢献した。さらに国境当局の上層部にはウスコクの略奪品、とくに高級品が提供されていた。

ただ、略奪がオスマン帝国やヴェネツィアとの外交問題になれば取締を強化した。とくに一六世紀から一七世紀への変わり目の取り締まり強化は、それまでとは大きく異なった。

#### 4、セーニ駐留部隊の構成、宮廷軍事局との指揮関係

セーニの兵士の多数は無給兵士だった。無給兵士はヴェントリーニと呼ばれた。その中にはセーニで生まれ、本部隊の給与はもらっておらず、ウスコクの略奪にだけ参加する者もいれば、よそから来てセーニ近郊に住みつき、ウスコクの略奪に参加して、分け前をもらう者もいた。

数の上では有給のウスコクよりもこの無給ウスコクの方が多くなるのだが、その数は一五八〇年代に移住者全体の急増とともに増え、そのため、ウスコクの行動や全体の

	1571	1585	1588	1593	1598	1590	1600
有給兵士	150	200	200	300	400	150	150
無給兵士	(250)	800	(1800)		600	(250)	(550)
合計	400	1000	2000	3500	1000	400	700

表1 セーニのウスコクの数

出典：Catherine Wendy Bracewell, *Ibid.* (地図1) , p.127.

統率の上で、有給兵士以上に重大な影響力を持つ存在になる。

無給のウスコクは略奪の分け前だけで生きていたため、とくにセーニに来たばかりで、早く手柄を立てたいと考えた者は、少しでも多くの襲撃を求めたのである。

有給兵士は、軍政国境の徴兵名簿に記載され、セーニの部隊で働きに応じた給与を支払われていた。その階級は、隊長、副隊長、あるいはヴォイヴォダによる評価とともに上がっていったが、評価の基準は「男気」と「経験」、「忠実さ」などであり、昇進の結果、物資（衣服や穀物）の支給で優遇されたり、年金を得ることも、またもし人質をつかまえれば公に身代金を得る

可能性もあつた。<sup>20)</sup>

セーニの隊長が、ウスコクの最も上級の指揮官であつた。隊長は、一五七八年の軍政国境の再編以降、内オーストリアの貴族らが推薦する候補から宮廷軍事局が選んだ。その任務は、有給兵士の統率と要塞への配備、襲撃作戦の実行であり、ウスコクの規律遵守にも責任を負つた。隊長は、軍政当局中央の操り人形というわけでもなく、ウスコクの立場で給与や物資補給を要求したり、軍政当局中央からウスコクの襲撃を非難されれば、ウスコクを擁護することもあつた。隊長がウスコクの襲撃を助けるのはそれなりに理由がある。そもそも隊長の給与は内オーストリアの貴族らの助成金から支払われたのだが、支払いは不定期で、その足りない部分をウスコクの戦利品で補つていたのである。<sup>21)</sup>

しかし隊長がウスコクの襲撃を止めようと思つたとして、一体かれに何ができたであろう。一五九八年のJ・レインコヴィチ將軍は船を岸壁に縛り付けた。その後頻繁に行われた対策としては、隊長の主導で、軍政国境当局がウスコクの略奪行為をすべて登録させた。略奪品の差し押さえも行つたが、これにはウスコクたちが先手を打つて、セーニに戻る前に略奪品を分配した。

結局のところウスコクに収入の道がなければ、かれらの襲撃を禁止できなかった。隊長は、隊長に次ぐヴォイヴォ

ダに比べると「よそ者」で、隊長の背後にいる中央権力の施策がウスコクの要請とどこまで合致しているかによつて、隊長の影響力も変わったのである。<sup>22)</sup>

## 5、宮廷軍事局、軍政国境当局との指揮関係

これまで見てきたことからすれば、ハプスブルク帝国の中枢と軍政国境当局はウスコクの不服従に対して徹底した対応を取れなかつた。ではなぜそうなつたのだろうか？

そもそも国境の戦争には、主要な軍事作戦と同時に、小さな略奪戦が繰り返されたのだが、その略奪部隊がオスマンの軍勢を国境からいくらかでも押し返すのに貢献し、またかれらのおかげで貴族や大公、皇帝に財政的負担をかげずに済んだ。ハプスブルク帝国にとつてウスコクはこうした国境兵の理想形だつた。給与の支払いが滞つてもセーニの部隊はいつも兵士で溢れ、とくに無給兵士ヴェントリーニは予算のかからない補助部隊だつた。しかもウスコクは、本来の軍事作戦にも対応できたのである。

それでもヴェネツィアや教皇から圧力がかけられれば、ハプスブルク帝国は船舶への襲撃を抑えなければならぬ。政治的圧力のみならず、ヴェネツィアの海上封鎖はステイリア大公にとつてリエカやトリエステでの交易に大きな痛手になる。だからこそ、海賊行為を控えるようセーニに使

アドリア海海賊ウスコクから見た近世の国家形成（越村）

節団を派遣せざるを得なかった。オスマン帝国の外交圧力も大きく関係した。

しかしヴェネツィア公使は、ウスコクを完全に追放しないかぎり海賊行為は止まないし、ウスコクがオスマンにたいする警備兵として欠かせない以上、かれらを追放することはできないことを見抜いていた。<sup>23)</sup>

ウスコクの活動を抑えられない最大の要因は、関係者間で合意を形成することの難しさにあった。セーニは国王自由都市であり、クロアチア・ハンガリー国王つまり皇帝の支配化にある一方、部隊は大公に属していた。帰属の問題に加え、両者の、国際関係にたいする見方の違いが対セーニ政策を複雑にした。皇帝はオスマンとの宥和を望み、大公は国境での「牽制」を重視した。さらには各層の利害関係が絡んでいた。ズリンスキなどの大貴族や海岸の諸都市はウスコクを抑制して、ヴェネツィアの報復を避けようとした。一方、内オーストリアの貴族らや軍政国境当局はウスコクがもたらす戦利品をあてにした。<sup>24)</sup>

こうして一六世紀を通して、一貫したウスコク政策がとられることはなく、ハプスブルク帝国の利益に明らかに反することがなければ、当局はとくに介入しなかった。しかし、既述の通り一五九〇年代からヴェネツィアの圧力が強まると、ウスコク活動のメリットよりもデメリットが大き

くなる。するとハプスブルク当局も、ウスコクへの統制を強める。国家間の関係の変化に対応するのである。

## 第二章 三大国の間のウスコク

### 1、ウスコクの国境での「実力」

ウスコクを支持する人々は、かれらなしではトリエステからフリウリまでキリスト教徒の境界がオスマン軍の攻撃から守れなかったと言う。ヴェネツィアがウスコクの略奪に苦情を述べ、かれらを内陸へ追い込むよう提案がされる度に、ウスコクは海の境界でオスマン勢を抑止したのであり、もしウスコクを追放すればオスマン軍が内オーストリアやイタリアにまで侵攻してしまうという声も囁かれた。しかし、おそらくは、かれらの支持者よりも、批判する側の方がウスコクの実力を分かっていた。一七世紀初め、ダルマティア総督の秘書官バルバロが、ウスコクの活動から受けた恩恵について、アドリア海におけるオスマン帝国の軍事的・経済的膨張をかれらが止めた点を中心に、こう述べている。<sup>25)</sup> 第一に、リカ地方からスクラデイン、ネレットヴァ河に至る海岸沿いのオスマン領で、ウスコクの襲撃をおそれたオスマン臣民が居住を避けるようになった。とくにリカ盆地は絶え間ない戦争によって土地や村が荒らさ

れ、略奪品こそさほど期待できなかったけれども、セーニから容易に到達できたため、家畜と捕虜を略奪する恰好の場所になった。このリカ地方にたいしてオスマン当局は、一五七〇年代後期、ヴラーフの牧畜民を住民が離散した土地に定住させた。大公アーネスト、アウアースペルク將軍、そしてウィーンの宮廷軍事局は、すぐに、境界のそばでオスマン住民が定住するのを防ぐため、ヴラーフ（一般の）を襲撃するようセーニに命じた。またセーニの隊長は、できるだけ多くの移民を殺害し、捕虜は海外に奴隸として売るよう命じられた。一五八〇年代と九〇年代を通して、軍政当局の指示、または自分たちの判断で、セーニのウスコクはリカへの襲撃を更に増やした。ウスコクは、オスマン臣民の定住を完全に防ぐことはできなかったが、それでも、ウスコクの定期的な襲撃はヴラーフをリカからハプスブルク領に移住させ、同時に、リカに駐留するオスマン部隊の拡大を防いだ。

セーニから近かったリカは、例外的なケースだったかもしれない。しかしウスコクがセーニから離れた地域でもオスマン臣民の定住を妨害したと見る者は、オスマン側クリス地域の方長官など他にもいた。そして住民の多くも、ウスコクの脅威がなければ、オスマン兵はキリスト教徒地域をもっと攻撃したに違いないと思っていた。

バルバロは、また、オスマン帝国が自らの艦隊を武装させるためにアドリア海の港を使うことを、ウスコクが他の誰よりも不可能にしたとする。たしかにヴェネツィア共和国も、アドリア海をめぐる軍拡競争を案じ、オスマンが船の武装を強化しないよう、帝国の中央政府と協定を結んでいたが、オスマンの地方当局がこうした協定に背くのを防げないこともあった。その協定違反を防ぐ上でウスコクが果たした役割は、オプロヴァツ（ザダルより上のズルマニヤ川沿いの小さな港）での造船をめぐる動きを見れば分かる。オプロヴァツ辺りは造船用の材木が豊富で、そこでオスマンの艦隊を作ろうという試みが時折行われた。まず一五三〇年代、対セーニ用に艦隊を作る計画が練られたが、ある年の六月、セーニからの遠征隊が、夜陰に乗じて、そこで建造されていた四隻のフスタ船（帆船だが漕ぎ手もいる小型の高速船）と、ガレー船を燃やし、オプロヴァツの町を破壊した。オプロヴァツでフスタ船を造る計画は一五六〇年代と八〇年代にも復活するが、ウスコクの襲撃によってどれも頓挫した。

バルバロが指摘した最後の点は、オスマンの港での商取引を妨害することで、間接的にヴェネツィアの港の繁栄に貢献したということだった。オスマン商人の輸送がウスコクの攻撃に非常に弱かったことは明白で、ガベラ（ネレト

アドリア海<sup>(1)</sup>の海賊ウスコクから見た近世の国家形成(越村)

ヴァア河口の主要なオスマン貿易港)は、ウスコクがイスラム商人の貨物を物色するうえで格好の場所だった。そこは沼地で、水草が繁茂し、そこへ行くには浅瀬の海峡を通る必要があった。ウスコクは、ただ海峡をふさぎ、待ち伏せするか、船や倉庫を襲うため夜間波止場に降りるだけできなかった。オスマンの地方長官は、ウスコクの襲撃に対する防衛として、そこで要塞を建設するよう命じた。それでもやはり、ウスコクがガベラ港を襲うのも、一度ならずラグーザ(ドウブロヴニク)の塩倉庫を襲うのも防げなかった。一五九二年、オスマンの商人たちは、ウスコクがネレトヴァア河の交通を妨害し、「狛下の領土を脅かすのみならず、狛下の収益に損害を与え、不足させるものであります<sup>(2)</sup>」、とスルタンに訴えている。その後まもなく、収益の低下についてヴェネツィアに抗議するため、オスマン側はネレトヴァア地区のデルヴィシユ・アガを特使として派遣した。特使はヴェネツィアのドーージェ(元首)にこう述べる。「かつては、ネレトヴァアの物品税を高額で競売にかけるのが習わしでした。それが今や、この収益が、ウスコクによる損害のため、失われてしまいました<sup>(3)</sup>」。

ウスコクの活動は、間接的なかたちでも、ネレトヴァア河口で交易の減少をもたらした。かれらの襲撃は西側の市場にオスマンの商品が流入するのを止めることこそでき

なかった。しかし、この交易の方向性を大きく左右した。一五六〇年代から、ダニエル・ロドリゲス(レヴァントとの取引で有名なポルトガルのユダヤ人)は、スプリットの港をヴェネツィアとオスマン商業の中継地点と位置づけ、開発に乗り出した。かれが、それまでありふれた港だったスプリットを選んだのは、海でも陸でもウスコクの襲撃から守りやすかったからだ。この「安全」はアドリア海のユダヤ人商業コミュニティにとってきわめて重要である。このコミュニティが、特に、ウスコク<sup>(4)</sup>の海賊行為に弱かったからである。ただこの「安全」はオスマン帝国との交易に関わるものなら誰にでも等しく魅力的なものだった。このスプリットから、オスマン商人は武装した輸送船団によってヴェネツィアに商品を送ることができた。スプリット港は、一五九〇年代に中継港として繁栄する。一方オスマン領のネレトヴァア地域は、急速に衰えていく。またオスマンとの交易の中継港だったドウブロヴニクの役割は新たなライヴァルの出現によって脅かされ、苦境に立たされる。ドウブロヴニクは特使をボスニアの長官に送り、スプリットが「ウスコクと悪人の巢窟」であると告発し、スプリットの成功、それはすなわちドウブロヴニクが衰え、スルタンへの貢納金が払えなくなることを意味すると警告した<sup>(5)</sup>。



## 2、時代遅れになったウスコク

ここからは、ウスコクと、近世諸国家の形成と国家間関係の推移との関わりを見ていきたい。

### ①ウスコクとオスマン帝国

ウスコク集団は当初オスマン帝国に征服された地方の人びとからオーストリア国境の人びとそしてヴェネツィアから流れてきた人びとから成る多様な人びとの集団だった。そのかぎりでは、ほぼ同じ時期、東・南シナ海の後期倭寇が多様な民族的出自からなっていたのと似ている<sup>(29)</sup>。しかしウスコクは、次第にオスマン支配からのがれたヴラーフが多数を占めるようになる。そのヴラーフが今度はオスマン帝国のヨーロッパ侵攻に立ちはだかる。F・ブローデルの『地中海』にこういう叙述がある。「地中海ではなく陸地が危なくなつた」原因となつたのは、おそらく、クロアチア(ママ)の城塞都市シサクにいたボスニアの地方総督ハッサンの敗北である。それまで、このハッサンはすでに何度もウスコク人に対する大規模な作戦行動を繰り返してきていた。「中略」。ところが、一五九三年六月、コンスタンティノープルに入った情報によれば、問題の地域で常時繰り返されていた掃討作戦はクパ川の岸辺で完膚無きまでの敗北に終わった。この敗北で、ハッサン自身が戦死し

たほか、何千人にも上るトルコ人が命を落とした。広大な地域が戦利品として戦勝者たちの手に落ちたのである<sup>(30)</sup>」。オスマン支配から逃れたバルカンの原住民が、一六世紀の末になって、クロアチアの地でオスマン帝国のヨーロッパ侵攻に立ちはだかつた格好である。

### ②ウスコクとヴェネツィア

まず、ヴェネツィアでは、商人たちの間で、商業活動への妨害を防ぐために、オスマン、ヴェネツィア両国の良好関係を望む声も聞かれた。しかし、ダルマティアとレヴァントを結ぶ境界の、キリスト教を守る防波堤としての役割を強調する声も当然あつた。そしてヴェネツィア国家の指導層には自分たちの領土の狭さを不安視する向きもあつた。結局のところヴェネツィア指導層は、キリスト教の宗教連合の狙いに反対することを避けて、オスマンに反対するもう一つ別の連合、つまり外交上の反イスラム連合という選択の余地を残した。このような議論をウスコクは知る由もなく、ウスコクはヴェネツィア指導層をキリスト教世界に対する反逆者とみなした。こうした(両者の)相互不信がおよそ一〇年、ウスコク戦争まで続き、ヴェネツィアは、自分たちの貿易がこれ以上妨げられるのを防ぐため、大部分のウスコクを海岸から一掃したのである<sup>(31)</sup>。



アドリア海、地中海、黒海、ウズベクから見た近世の国家形成（越村）

### ③三大国の（およびその相互関係の）変化とウズベク

ウズベクを掃すという決断は、ハプスブルク帝国にすれば、その軍事システムが非正規部隊である無給兵士のウズベクに大きく依存していたので、少なくともオスマン帝国との長期戦争の間は不可能だった。その上、ウズベクがキリスト教世界の防壁を自負しており、この宗教的な熱意は、クロアチア海岸地域の人々にハプスブルクへの協力を訴えるには最良の手段だったので、オスマンとの戦いの間、かれらに移住させることなど考えることもできなかった。

ところが一六〇六年のジトヴァ・トロク条約で、オスマン帝国とハプスブルク帝国の関係は新時代に入る。今やオスマン帝国は、ルドルフ二世とかれの後継者をウイーンの国王ではなくハプスブルク皇帝と呼ぶようになる。ジトヴァ・トロク条約、それは、オスマン帝国に従来のようにハプスブルク領内に進行できないことを痛感させ、ハプスブルクとオスマン関係が大きく変化することを予感させた（もちろん一六八三年のウイーン包囲に象徴されるようにオスマン進攻が完全に止まったわけではない）。

国境をはじめ、ハプスブルクとオスマン両国の懸案事項については力による解決から、法的な根拠にそって解決される段階に進んだ。アドリア海、そして、クロアチアでの戦争は、こうしてより近代的な、より合理的な関係性

の中で行われ、そうした方向性は、ウズベクのような対立的でアナーキーな要素を時代遅れにしていっていった。またウズベク戦争（一六一五〜一七一年）は、長期戦争と同様に、少しの領土の変更もなしで、ヴェネツィアとハプスブルク関係と、ヴェネツィアとオスマン関係の相互依存性を定式化した紛争でもある。

一六一七年のウズベク戦争の終りを告げる条約は、ヴェネツィアと内オーストリアの軍の直接的な対立を終えるとともに、セーニとその他の海岸地域から、海賊ウズベクを追放することを定めた。その際、有給兵士を無給兵士と切り離し、無給兵士だけを追放の対象とした。有給兵士にも海賊行為があったのだが、かれらの行動は、ハプスブルクとオスマン対立にもなう軍事行動の一環として免責されたのである。

表面上、ヴェネツィアは、オーストリアの大公領を攻撃することによってその要求を受け入れさせたように見える。しかし、当時のヴェネツィアに、他国に対して武力を使って何か要求をのませる力があつたようには思えない。むしろハプスブルクの側が政治的な理由のためにウズベクを一掃に同意したと考える方が自然である。当時ハプスブルク帝国は北方でボヘミアの貴族たちとの争いに関与している、南方の国境ぐらいいは、完全に平和にはいかなくとも、

安定させておきたかったはずである。そしてヴェネツィアと同じ政治的目標に近づいていった。その目標がウスコクの一掃だったにすぎない。

一六一七年の平和条約以後も続いた勢力関係は、同じくキリスト教国同士の同盟というよりも、ヴェネツィアがフランス、イギリス、オランダと組んだ反ハプスブルク連合という意味で、直後の三十年戦争の同盟を先取りしたものである。

最後に、ヨーロッパ意識という点から、三国間の関係を俯瞰してみよう。かつて一六〇〇年のアドリア海において、オスマンと対峙する中で、ハプスブルクとヴェネツィアの間に、キリスト教徒同士という意識に代わるようなヨーロッパ人としての共通意識は生まれなかった。むしろ、セーニのウスコクが活動すればするほどオスマンの脅威が叫ばれ、両国は争ったのである。

オスマン帝国は、自らの構造的な限界のため、少なくとも当面は領土を拡張することができなくなる。こうしてハンガリーとクロアチアの領土が確定され、ハプスブルクにとつては、南東ヨーロッパ諸国との関係が三十年戦争の間は重大な変化はないことが保証された。しかし、この三十年戦争によってヨーロッパを一つの国にしようとするハプスブルク家の「夢」もまた潰えたのである。

### 第三章 近世帝国の形成とウスコク

前章までの近世帝国の動きを踏まえて、本章では境界民の長期的な動きを見ながら、かれらと近世帝国との関わりについて検討する。

#### 1、ウスコクとヴラーフ

ウスコクの「最盛期」に中心的な要因となったヴラーフは、今日クロアチアに住むセルビア人の、また一八四八年にウィーン皇帝を革命軍から守った「赤マント兵」（良知力『向こう岸からの世界史』未来社、一九七八年などが詳しい）の祖と言われる。しかし境界民ウスコクⅡヴラーフは、同じエスニシテイの集団全体よりもはるかに強力に、直接の「主」の旗印に自らのアイデンティティを見だし、「主」が違えば「皇帝派」や「ヴェネツィア人」に分かれるような集団であった。

一六世紀末、ウスコクの群れに流れ込んだヴラーフだが、それまで、かれらはオスマンの侵攻とともにオーストリアの国境で広くハプスブルク軍に加わっており、以下では、このようなヴラーフ兵全体の動きを俯瞰してあらためてウスコクとヴラーフの関係を見たい。

## 2、ヴラーフとはどんな人たち？

一六三〇年、オスマン領から移住してきたヴラーフに土地・税制上の特権を認める「ヴラーフの規約」がクロアチアで公布されるのだが、そのヴラーフが、かつてオスマン支配下でどのように暮らし、オスマン支配から逃れていく理由、つまりヴラーフをオスマン側から押し出す「プツシュ要因」を見ていこう。

まず、ヴラーフとは何かであるが、一四世紀、オスマン帝国がバルカンに侵攻した後のヴラーフの自己認識は一定ではなく、不明瞭でもある。とくにプニェヴァツといった名で呼ばれるカトリック教徒の遊牧民は、自己認識が作られるプロセスは緩慢で、また地方によって大きな差がある。(一方正教徒はセルビア人という意識が強く、その多くがセルビア正教会に入っていた)。ここでは、バルカンの家族パターンを文化的モデルと考えながら、ヴラーフ集団をこうした文化的モデルのために闘った集団と捉える。それは、父系血縁の重視や父方居住、祖先崇拜、個人よりも集団の優先、花嫁買いなどからなる文化的モデルである。そして「オスマン支配下クロアチア」の代表的研究者N・モアチャニンはこうも言う。バルカンの封建国家の政治は、ヴラーフにとっては外部要因にすぎず、かれらの家族パターンをほとんど変えられなかった、ところが一八世紀

中葉、とりわけハプスブルク支配下のクロアチアでヴラーフの文化的モデルにも、一部だが変化が見られた。以下では、こうした動き全体を、オスマンの史料に沿って見ていく。

①初期オスマンの台帳からすると、オスマン支配層はヴラーフを、古バルカンローマ的な牧畜民を祖とする集団、戦時は頼りになる兵士とみなしていた。父系血縁が重視される民族的で、組織的かつ好戦的な集団、そして極めて機動的で、居住地を求めて継続的に分裂と再結合を繰り返す集団と考えていた。<sup>②</sup>

②しかし一六世紀最初の四半世紀までに、補助的にすぎないヴラーフを個人個人召集することが困難になったため、大半のヴラーフを予備兵あつかいとした。またヘルツェゴヴィナの一五三〇年の租税台帳をみると、ヴラーフは一般の平民レアヤーと同じ税を課された。これは税制の改革を避けながら税収の増大を図った大宰相イブラヒム・パシヤが、特権的なフィロリー税ではなく、人頭税、羊税、その他一般的な諸税をヴラーフに課したことを指している。フィロリー税については、クロアチアの、ハンガリーに近いスリエム地方と中部スラヴォニアを見ると、その額は一ドウカトで、人頭税の一家全体の合計よりも多く、ヴラーフが払う「真の」フィロリー税よりは少なかった。因みに、当該地域の人頭税台帳(一五五五年、一五八一

年)はすべてのキリスト教徒をヴラーフと記載し、かれらにフィロリー税を払わせていた。一方「真の」ヴラーフは人頭税台帳に記載されず、「真の」フィロリー税のみを払っていた。それは、「広義の」ヴラーフと「真の」ヴラーフが税当局からの区別の幅が小さくなっていったか、あるいは住民自身が共通のライフスタイルに向かう傾向にあったためと解釈できる<sup>①</sup>。

モアチャニンによれば、オスマン国境近辺のヴラーフの地位は三つの局面をたどって変化した。つまり第一局面(一五世紀半ば〜一六世紀初め)のヴラーフ兵士に準じた地位が、第二局面(一六世紀初め〜一六二〇年ころ)でヴラーフルレアヤーの地位に近くなり、第三局面(一六二〇年ころ以後)にヴラーフルレアヤーとの区別がなくなったのである<sup>②</sup>。

### 3、クロアチアおよびスラヴォニア国境側のヴラーフ

一六・七世紀のハンガリーは、一部がハプスブルク領になり、スラヴォニアもハプスブルクが直轄する軍政国境であった(地図2参照)。同じ頃、(ザグレブを中心とした狭義の)クロアチアの、またスラヴォニアのオスマンとの国境では、バルカン半島内部からハンガリーおよびオーストリアに向けて、人々が大規模に移動していた。その中で、

とくにヴラーフがハンガリー・オーストリアに移っていく様子を再現しながら、ヴラーフをハプスブルク側へ引く張った「プル要因」を探ってみよう。

ここでは、スラヴォニア国境地帯の兵員名簿から、ある時点で兵員の中にヴラーフがどれだけいたかを推測してみる。

#### ①兵員名簿の中のヴラーフ

兵員名簿の姓名を見れば、それが地元のカイ方言の姓名と、移住者が使うシュト(カイもシュトも英語の *What* にあたる)方言の姓名とに分類することができる<sup>③</sup>。バルカン中部および西部のヴラーフは、ローマ人起源だが、中世の間にスラヴ人と同化した。クロアチアの最新の(N・シュテフアネツツ)の研究によると、かれらは全てではないものの、多くが正教を信仰していた。中世のヴラーフは半遊牧(完全な遊牧ではない)の生活をしながら移牧を営んでいたが、オスマン支配下で定住に近づいていく。その仕方は、為政者の政策や定住する地域に到達した時期によって異なる。かれらが移住したのは、一五世紀以降、主にオスマンの侵攻を避けるためか、またヴラーフ自身が牧草地や交易の機会を求めて移住したためと考えられる。そして一六世紀末以降は主により良い生活環境を求めて、あるいは、軍役を求めて移住した。その内一六世紀最初の一〇年

間から、かれらはあらゆる特権を求めてオスマンあるいはハプスブルクの軍役についたと考えられる。その点、兵員名簿の姓名を分析しながら確かめてみよう。

i 騎兵隊、歩兵隊の姓名について

騎兵隊についてみると、一五七七年と一六三〇年の間に大きな変化が起こる。クロアチア人、スラヴォニア人の大貴族や貴族に率えられる騎兵隊が給与台帳から消えたのである。一五七七年には当地の大貴族は隊員五〇からなる騎兵隊を指揮しており、そこには新参者も地元民も（いずれも貴族出身者が多い）含まれていた。この騎兵隊は、中世の貴族騎兵以来の伝統によって雇われていたが、騎兵は歩兵より高くつき、しかも軍事的な技術や戦術が変化すると、満足な成果を上げられなくなった。一方内オーストリアの諸身分やハプスブルク家は、一五七〇年代以降、国境での軍事的な優位を確保しようとする努力しており、一六三〇年には現地の騎兵は存在しなくなる。かれらにしてみれば、何かにつけて競合する地元貴族を上手く切り捨てることができたことになる。一六三〇年も若干の騎兵は残存したが、それはドイツ人かハプスブルク家に忠実な者に限られた。<sup>40</sup>

一方歩兵だが、かれらは最も給与が少なく、最も数の多い兵士であった。一五七七年には一五〇〇、一六三〇年には九四〇の歩兵が給与を受けている。その多くはスラヴ系

表 2 歩兵隊指揮官 J・ラドミロヴィチ配下の 80 人の歩兵(1577 年)

出典：Nataša Štefanec, Demographic Changes on the Habsburg-Ottoman Border in Slavonia(c. 1570-1640), *Das Osmanische Reich und die Habsburgermonarchie*( Akten des internationalen Kongresses zum 150-jährigen Betehen des Instituts für Osterreichische Geschichtsforschung, Wien, 22.-25. September 2004, Herausgegeben von Marlene Kurz, Martin Scheutz, Karl Vocelka und Thomas Winkelbauer), p.571-2 参照。

一、ハンガリー・スラヴォニア王国領の出身者
イヴァン・オド・コプリヴニツァほか二七名
二、オスマン支配地域の出身者
マルティン・オド・ボジェガほか二六名
三、その他
マルティン・ハイドゥクほか二七名

の姓名(イヴァン・ヴェリキヤコブレノ・ノヴァコヴィチなど)など。一方ハンガリー系の名(マーチャーシユ)も、歩兵隊の指揮官の中に見ることができ。

スラヴ系の姓名が歩兵の中に多いことからすれば、当時のスラヴオニア国境での有給兵士の半数以上はスラヴ系の歩兵だったと推定される。ただ歩兵あるいはその指揮官の中にも、カイ方言ではない、つまり地元とは違う姓が多い。一五七七年の歩兵隊指揮官二五名中七名(ラドミロヴィチなど)、一六三〇年の歩兵隊指揮官三五名中一三名(ヴォグダノヴィチなど)がシュト方言独特の姓を使っている。これらはオスマンⅡスラヴオニア国境、クロアチアの危険地帯や被征服地域、バルカン奥地の出身と考えられる。さらに一五七七年における大きめの歩兵部隊に焦点を当ててみる。そこには八〇人の歩兵がおり、それが三つのグループに分けられる。

第一グループは、それぞれの歩兵の姓からスラヴオニア国境のハプスブルク側(コプリヴニツァは当該地域の都市で、現存する。オドは英語の From) から来た。このグループは一五七七年の時点で最も数が多かった。しかし第二グループを見ると、一五三〇年代と一五五〇年代にオスマンに征服されたスラヴオニア東部及び一五八〇年代に征服されたクロアチア中部(ポジエガその他)から、新たにやっ

てきた者が多かったことが分かる。このグループは想定以上に人数が多く、注目に値する。そして第三のグループは、これまでの二つのグループに分類できなかった「その他」になる。

一五七七年の兵員名簿の姓名から、この年にスラヴオニア国境へ流入してきたヴラーフの地域的分布を見極めることは難しい。当時、かれらはほとんど個人あるいは小集団でたどり着き、兵員名簿からわかる範囲で言うと、既存の部隊の中に散らばっていたと考えられる。

#### ii 兵員名簿の出身地から読み取れるヴラーフの分布

一五七七年の名簿には、多数の兵士が姓なしで記録されている。代わりに出身地が記されている。たとえば一五七七年のある歩兵隊の名簿を見ると、チャコヴェツあるいはヴァラジュディン(いずれもハンガリーに近い都市)出身者が多いことが分かる。一五七七年のリストに挙げられた一七八九名のうち七二七名が姓のかわりに出身地を示し、さらに九三名がクロアチアの、あるいはクーパー河の向こうの出身であることを示すホルヴァート(クロアチア人の意)という姓を名乗っている。注目すべきは、一五七七年の時点ではホルヴァートからさらに派生した姓がないということ。これはホルヴァートの姓を持つ者は、一五七七年の時点では移住の最初の波に属していたことを



示唆している。<sup>④</sup>

状況は一六三〇年に変わる。一二八〇名のほとんどが姓を持ち、姓の代わりに出身地を示すことば（オドやイズ、つまり英語の from）を持つ者がわずか一四三名しかおらず、それもほぼ確実に地元の出身だった。もつと遠くから来たことを示す姓ホルヴァートあるいはその派生形を持つ者は二一名しかいなかった。

要するに、一五七七年には多くの者が姓ではなく出身地名を用いていた。いくつかの歩兵隊では、実に七〇%の人々が固有の姓を持っていなかった。一六三〇年でさえ、地元の多くの境界民は姓を持たず、名簿上出身地で記されていた。<sup>⑤</sup>

固有の姓の代わりに民族名あるいは地名が用いられていたことは、クロアチアⅡスラヴォニア国境の危険地帯や被征服地から逃げてきてスラヴォニア国境で勤務する兵士の、地域分布や移動性を知らうとするには好都合だが、そもそも、なぜこんなにたくさんの人たちが、固有の姓なしで兵員名簿に記録されているのかは、明らかではない。その理由として第一に考えられる点は、逃亡した農奴がそれぞれの主人から隠れようとする方策だったのかもしれない、ということ。二つ目は、一六世紀においては、姓の使用はスラヴォニアのこの地方ではまだ一般的でなかったと

いう説だが、税の徴収を見る限り、スラヴォニア地方の課税対象者の多くは固有の姓を特っている。三つ目は、兵士自身は人員検査の場におらず、姓が人づてにしか伝達されなかったという説だが、しかしこれも、人員点検の厳しさからすると考えにくい。<sup>⑥</sup>

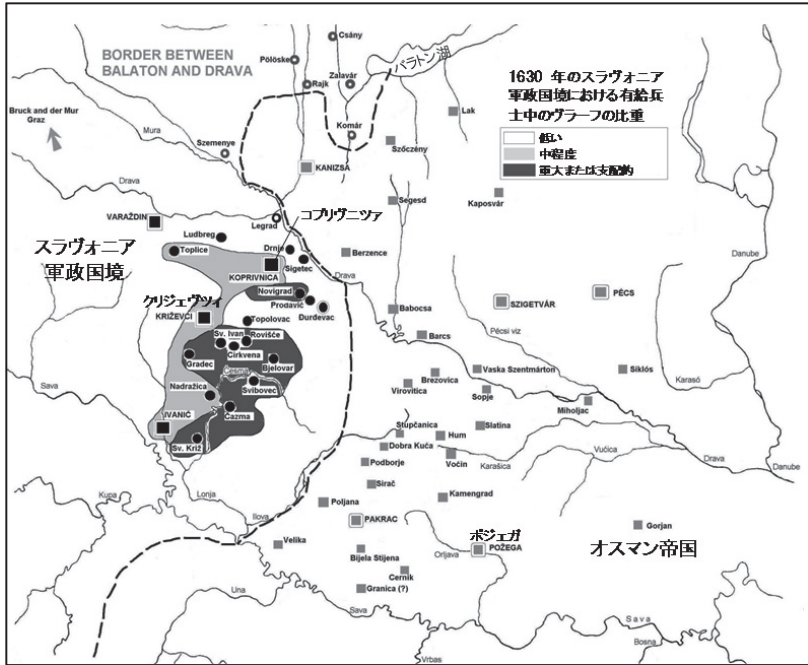
具体的に固有の名前や姓を見てみよう。

**一五七七年の名簿を見ると**、多くの兵士は新約聖書起源の名前を特っている。例えば、ジョルジュ、ペーテル、マルコ、マーチャーシユ、イヴァン、スチエパンなど。一五七七年には「ヴーク（狼）」という名から来た姓名が非常に少なく、またラドヴァン、ラドイェ、ラドミル、オブラド、プレラドなどやその派生形もわずかである。

対照的に一六三〇年には、古い、ヴークからの派生形である名（ヴコサヴ、ヴカシン、ヴコイェ、ヴチツチ、ヴチュコ、ヴクミルなど）やヴークからの姓（ヴコヴィチ、ヴクサノヴィチ、ヴチン、ヴチツチなど）そして次のような名、つまりラドヴァンやラドミル、ラドイェ、オブラド、プレラド等々、そして以上から派生した姓が、名簿に非常に多く見られる。（ただいくつかの歩兵隊では、新約聖書からの名の方が多い）。

一五七七年には、スラヴォニア以外から、とくにクロアチアⅡスラヴォニア王国の被征服地域からの出身者が、





地図2 スラヴォニア軍政国境における有給兵士中のヴラーフの比重

出典：Ibid., p.577.

名簿上数多く現れる。かれらは新約聖書からの名を持ち、その多くは固有の姓をもっていないか、あるいは全く姓がない。

一六三〇年にも新約聖書からの、シュト方言の名を持つ個人が、クロアティヤ・スラヴォニア王国の被征服地域から流入し続ける。一方この年には、いわゆるヴラーフの大小の集団がバルカン奥地からスラヴォニアの国境へやってきた。それは、遠いリム川流域（ヘルツェゴヴィナ）からの数多くの移住が、数十年続いたのちにやってきた。一六三〇年のスラヴォニア国境のいくつかの部隊は、完全にそうしたヴラーフ移民のみで構成されていた。かれらは、ほとんど例外なく、固有の姓をもっていたが、かれらの姓も名も新約聖書からのものではなく、もっと古い背景を持つていたのである。

以上、一六三〇年の名簿から、スラヴォニア国境の新入人口の地域分布を地図2のように再構成できる。

濃い色は新人のヴラーフの人口密度が高いところを示す。かれらはスラヴォニア国境の

アドリア海、地中海の海賊ウスコクから見た近世の国家形成（越村）

全域に、均一に分布していた訳ではない。新参者はほとんどが国境にいた。その内比較的多くはクリジエヴツィ隊長区におり、コプリヴニツァ隊長区にはそれほどいなかった。理由はいくつか考えられるが、その一つはクリジエヴツィ地域の所領が戦いで荒廃していたの比べ、コプリヴニツァの所領は戦いの間も維持されていたという点にある。後者は新たな住民を必要としていなかったのである。ただそのコプリヴニツァ地域でさえ、ノヴィ・グラードなどのいくつかのエリアではヴラーフが広く分布していた。これらのエリアは軍政下にあつたので、ヴラーフは必要さえあれば定住できたのである<sup>45</sup>。

以上をまとめると、半遊牧のヴラーフといわれる人たちのオスマン側の動きはこうなる。

一五世紀半ばから一六世紀初めの第一局面は、オスマン帝国のバルカン侵攻の第一波（一四五三年のコンスタンティノープル陥落・一四五九年のセルビア征服・一四六三年のボスニア征服）に重なり、その間ヴラーフは兵士に準じた地位にあつた。第二局面はその後から一七世紀初めの一六二〇年ころまでで、ヴラーフはレアヤーの地位に近くなる。オスマン侵攻の第二の波は、一五二六年のモハーチの戦い・一五二九年と六六年のウィーン遠征と続く。この時期、ヴラーフの軍事的役割が、農奴の賦役と変わらない

荷役や要塞の修復や食料運搬が変わる。一六世紀半ば以降、半遊牧民をヴラーフと呼んでいたのが、まもなく「バルカンの家族パターン」を営む人々を指すようになり、さらにはこのパターンに属さない人々も含めるようになる。第三局面は、一六二〇年ころから後であり、ヴラーフとレアヤーとの区別がなくなる。一六二〇年ころ、専らイスラム教徒の正規兵によって防衛を強化しようとするため、ヴラーフは非武装化される。一八世紀には明らかにレアヤーとの区別がなくなる。この過程でオスマン帝国のヴラーフは、特権の喪失を補うため、または家族パターンを守るため移住したのである。

一方ハプスブルク側だが、大規模なヴラーフ・グループを、オスマン帝国領域からハプスブルグ側の国境に組織的に移動させる交渉が一五八〇年代に始まり、一五九〇年代より、大規模なグループ（数十から二〇〇あまりの家族）のヴラーフと呼ばれる新規入植者がハプスブルグ側の国境地帯に到着する（多くが家族単位で）。一六三〇年の「ヴラーフの規約」迄にこれら家族は整然と定住する。

## 結びにかえて

以上ウスコクの形成から衰退までの過程を概観した上

で、オスマン帝国とハプスブルク帝国の長い国境線でのような人の移動があったか、一六世紀末のヴラーフの移動を中心に見てきた。オスマン支配から逃れたヴラーフは、陸ではオスマン軍のヨーロッパ侵攻に立ちはだかる兵士になると同時に、海ではウスコクとしてヴェネツィアの船を襲い、かれらを取り締まらないオーストリアと取り締まりを求めるヴェネツィアとを反目させ、いわゆるウスコク戦争を引き起こした。その後多くは内陸に「戻った」。

一六三〇年以後、旧ウスコクも含めたヴラーフは、軍政国境の「自由農民Ⅱ兵士」として、中東欧の他地域の再版農奴制とは異なる土地・軍事制度を生きた。

冒頭に触れたA・リーバーは、こう述べている。

一七世紀の間ドナウ川地方とエーゲ海で、ハイドゥック、クレフト、アルマトロスという盗賊集団が文献に頻出する。かれらの活動は、断続的な戦争と社会秩序の崩壊とともに活発になる。かれらの略奪は、地元の農民には慕われない。しかし徐々に、特に南スラヴの土地で、ハイドゥックは英雄的盗賊として神話化される。一九世紀には、セルビア人、モンテネグロ人、ブルガリア人やギリシア人の間で、ハイドゥックとクレフトは、オスマン支配に対する民族的反抗の原初形態と見られた。<sup>(1)</sup>もちろん、それはウスコクにも当てはまるのである。<sup>(2)</sup>

註

(1) 共産主義体制下のユーゴスラヴィアでは、ウスコクを「正義の闘争」「他国の支配からの解放」として描くことが多かった。一方外国の研究者たちはウスコクと海賊行為を大國間関係の攪乱要因とみなしたり、略奪で暮らし、特定のライフスタイルをもつ境界社会の例とみなした。そこへ、一九九〇年代に登場したのがC・ウェンディ・ブレイスウェルであり、女史は、研究の焦点を政治史や軍事的なプロパガンダではなく、ウスコクそのものと、自身の歴史的役割に対するウスコクの見方に絞っている。

(2) Catherine Wendy Braeewell, *The Uskoks of Senj: Piracy, Banditry, and Holy War in the Sixteenth-Century Adriatic*, Cornell University Press, 1992, pp.98-108 を参照。

(3) デイヴィッド・コーディングリ編、『図説海賊大全』、東洋書林、二〇〇〇年、一八〇—一九三頁を参照。

(4) Ruth Simon, *The Uskok Problem and Habsburg, Venetian, and Ottoman Relations at the Turn of the Seventeenth Century*, [www.essaysinhistory.com/articles/2012/102.p.3](http://www.essaysinhistory.com/articles/2012/102.p.3) を参照。

(5) *Ibid.* を参照。

(6) 山下範久、『世界システム論で読む日本』、講談社、二〇〇三年、六三頁。

(7) 同上、八六頁。

(8) 同上、八六—七頁を参照。

(9) Alfred Rieber, *The Struggle for the Eurasian Borderlands: From the Rise of Early Modern Empires to the End of the First World War*, Cambridge University Press, 2014.

アフリカ海、地中海、黒海から見た近世の国家形成(越村)

- pp.303-308, pp.290-1を参照。
- (10) *Ibid.*, pp.72-3を参照。
- (11) Catherine Wendy Bracewell, *Ibid.* (序章(㉑)), pp.58-9を参照。
- (12) In Horvat, *Monumenta uscechorum*, vol.1, p.5.
- (13) Catherine Wendy Bracewell, *Ibid.*, p.60を参照。
- (14) Alfred Rieber, *Ibid.* (序章(㉒)), pp.304-5を参照。
- (15) Catherine Wendy Bracewell, *Ibid.*, p.69を参照。
- (16) In Horvat, *Ibid.*, p.466.
- (17) Catherine Wendy Bracewell, *Ibid.*, p.94を参照。
- (18) *Ibid.*, pp.153-4を参照。
- (19) *Ibid.*, p.128を参照。
- (20) *Ibid.*, p.129を参照。
- (21) *Ibid.*, p.140を参照。
- (22) *Ibid.*, pp.141-150を参照。
- (23) *Ibid.*, p.265を参照。
- (24) *Ibid.*, p.289を参照。
- (25) Catherine Wendy Bracewell, *Ibid.*, (第一章(一)), pp.176-9を参照。
- (26) In Lopasić, *Acta historiam confinium*, vol.1, pp.171-3.
- (27) In Stanojević, *Senjski uskoci*, p.130.
- (28) Catherine Wendy Bracewell, *Ibid.*, p.179を参照。
- (29) 村井章介、『中世倭人伝』岩波新書 一九九三年、一九八―二一頁を参照。
- (30) フェルナン・ブローデル、浜名優美訳、『地中海』藤原書店、一九九五年、一―四頁。
- (31) Ruth Simon, *Ibid.*, (序章(4)), p.4を参照。
- (32) *Ibid.*, p.4を参照。
- (33) *Ibid.*, p.7を参照。
- (34) Miroslav Bertosa, *Jedna zemlja, jedan rat*, Istra 1615-1618, Pula, 1986, str.98を参照。
- (35) Nenad Močanin, Introductory Essay on an Understanding of the Triple- Frontier Area: Preliminary Turcologic Research, in Drago Roksančić ed., *Microhistory of the Triplex Confinium*, Budapest, 1998, pp.126-7を参照。
- (36) *Ibid.*, pp.128-9を参照。
- (37) *Ibid.*, pp.132-3を参照。
- (38) *Ibid.*, pp.132-5を参照。
- (39) Nataša Štefaneč, Demographic Changes on the Habsburg-Ottoman Border in Slavonia(c. 1570-1640), *Das Osmanische Reich und die Habsburgermonarchie* (Akten des internationalen Kongresses zum 150-jährigen Bestehen des Instituts für Österreichische Geschichtsforschung, Wien, 22-25. September 2004, Herausgegeben von Marlene Kurz, Martin Scheutz, Karl Vocelka und Thomas Winkelbauer), p.568を参照。
- (40) *Ibid.*, p.569を参照。
- (41) *Ibid.*, p.573を参照。
- (42) *Ibid.*, p.574を参照。
- (43) *Ibid.*, p.575を参照。
- (44) *Ibid.*, p.576を参照。
- (45) *Ibid.*, p.576-7を参照。
- (46) Alfred Rieber, *Ibid.* (序章(㉓)), p.73を参照。
- (47) *Ibid.*, pp.304-6を参照。
- (東京造形大学造形学部教授)